週刊ポスト5月27日号（2016年）

大人の修学旅行【後編】

引率 山下裕二（日本美術応援団長）
生徒 木下真理子（書家）

生誕300年

伊藤若冲、孤高の独創

米・プライスコレクションと奇想の水墨画がズラリ！

「ナマの日本美術を観に行こう」と始まった大人の修学旅行シリーズ。今回は、前回に続き天才絵師「伊藤若冲」回顧展。〝江戸時代のデジタル画〟といわれる『鳥獣花木図屏風』をはじめとしたプライスコレクションと深遠な水墨画を中心に、若冲が描き上げた世界観に誘う――

✣木下真理子（きのした・まりこ）書家。雅号は秀翠（しゅうすい）。大東文化大学で高木聖雨氏に師事。中国、日本古来の伝統芸術としての書を探求。映画『利休にたずねよ』やNHK『にっぽんプレミアム』に関わる題字なども手掛けている

✣山下裕二（やました・ゆうじ）1958年生まれ。明治学院大学教授。美術史家。『日本美術全集』（全20巻・小学館刊）の監修を務める。日本美術応援団長。銀座・ヴァニラ画廊で開催中の『人造乙女美術館』の監修も務めた

【上】「虎は日本にいなかったため、京都・正伝寺に伝わる朝鮮絵画を模写した『虎図』（エツコ&ジョー・プライスコレクション）。若冲は後に、水墨画でも同じポーズで『虎図』を描いています」（山下）

【左】『果蔬涅槃図（かそねはんず）』（京都国立博物館蔵）釈迦入滅の情景を描いた「涅槃図」。亡き母の鎮魂と家業の繁栄を祈願した青物づくしの作品で、お釈迦様をイメージした二股大根を中心に野菜や果物が擬人化されて描かれている

あらゆるものは成仏するという「悉皆（しっかい）成仏」の思想を表わす／エツコ&ジョー・プライスコレクション

『旭日雄鶏図（きょくじつゆうけいず）』真っ赤に染まった旭日と、若冲の代表的モチーフである鶏の組み合わせ。具体的な制作年は不明ながら、『動植綵絵』の制作前に描いたと考えられている／エツコ&ジョー・プライスコレクション

【上】『紫陽花双鶏図（あじさいそうけいず）』「数あるモチーフの中でも、鶏の絵が最も若冲らしいですね」（山下）／エツコ&ジョー・プライスコレクション　【左】『竹梅双鶴図（ちくばいそうかくず）』竹梅の前につがいの鶴が寄り添い、吉祥画として描かれたと思われる。伸びやかな竹とは対照的に奇妙なカーブを描く梅に個性を感じる／エツコ&ジョー・プライスコレクション

山下　江戸時代、円山応挙らと並んで京都画壇きっての人気絵師だった伊藤若冲ですが、明治以降、日本では正当に評価されずにいました。むしろ、海外での評価の方が高く、多くの作品が海を渡って行きました。

木下　私が若冲を知ったのは、06年に東京国立博物館で開催された『プライスコレクション「若冲と江戸絵画」』展がきっかけでした。米国人コレクターのジョー・プライスさんは、戦後いち早く若冲に注目されていたのですね。

山下　53年にニューヨークの日本美術店で『葡萄（ぶどう）図』にひと目惚れ

『鳥獣花木図屏風』若冲は2隻に計8万4000の桝目を描いた。右隻には象など29種、左隻には鳳凰など46種の鳥獣を描き、

して購入しました。以来、若冲を始め、江戸絵画を熱心に収集されています。大作『鳥獣花木図屏風』は、プライスコレクションの中でも象徴的な作品です。白象と鳳凰を中心に、たくさんの動物や鳥がユーモラスに、色鮮やかに描かれています。実はプライスさんのロスのご自宅の浴室は、タイルがこの絵と同じ柄なんですよ。

木下　「草木国土悉皆成仏」という、あらゆるものが成仏できるという考え方が、鮮やかな色彩で描かれていますよね。モザイク画のような技法も日本画では斬新です。

山下　「桝目描き」という若冲オリジナルの技法です。8万4000もの桝目で方眼が描かれ、〝江戸時代のデジタル画〟ともいわれています。約1㌢四方と精密な桝目の色を塗り分けて、模様も描き分けている。まだまだ研究の余地がある、大変興味深い作品です。

木下　若冲は水墨画も手掛けていますが、迷いのない筆勢とともに、水墨画にも緻密さが表われています。

『雪芦鴛鴦図（せつろえんおうず）』おしどりのつがいが水辺に遊ぶ。水面下に雌の顔が透けているのが面白い。若冲は『動植綵絵』の『雪中鴛鴦図』のおしどりのつがいでも、水中に顔を潜らせる雌を描いている／エツコ&ジョー・プライスコレクション

「葡萄図（ぶどうず）」世界屈指の若冲コレクター・プライス氏がニューヨークで見て、ひと目で気に入って入手したコレクション第1作。「電撃的な出会いでしたが、若冲の存在は知らなかったそうです」（山下）／エツコ&ジョー・プライスコレクション

山下　若冲は、水墨画でもオリジナルの技法「筋目描き」を生み出しました。墨のにじみを計算して描く画法で、淡い墨を隣り合わせて描き連ねると境目に白い線が浮かび上がる。『菊花図』の菊の花びらのように、奥深く優しいグラデーションが出るのです。

木下　単色で奥行きや立体感を表わすことは書道も同じですが、より豊かで深みのある線を書くには、技術だけではなく固形墨や硯の質も関わってきます。若冲は顔料や染料、墨などへの探究心も人一倍あったのではないでしょうか。

山下　若冲も、随分研究したと思いますよ。最高級の絹や絵の具にこだわり、21世紀の現代から見てもまったく古びた感じがしません。

木下　若冲の作品は、リアルでありつつどこか観念的で、また、装飾的でありながら厳かな感じがします。

山下　若冲は、若い頃から葉の虫食いをよく描いています。初期の作品『紫陽花双鶏図』には既に、虫食った葉が登場しています。それは晩年になっても変わらず、時には傷んだ鶏の羽根も描いている。ほころびゆく自然も命のありようだという若冲の死生観であり、彼の目にそれらは美しく映ったのですね。

木下　対象を観察し、本質を吸収したうえで描いたと聞きます。

山下　凝視し続けることで、目に映る景色が「色と形を持った特別のもの」に変わるのだ、という見方をしていたのでしょう。

木下　「神は細部に宿る」という言葉もありますが、花びら1枚、鶏の羽根1枚の美しさに迫る若冲の作品を直に見ると、デジタルでは解析できない霊性を感じます。

『石燈籠図屏風（いしどうろうずびょうぶ）』（京都国立博物館蔵）乱立する石燈籠をモチーフにした作品。「ここまで点描が凝らされた燈籠は、他に類をみません。ハロウィンのおばけのような、生き物めいたユニークな燈籠にも遊び心が感じられます」（山下）

生誕300年記念「若冲展」

伊藤若冲の初期から晩年までの代表作89点を展示。若冲が京都・相国寺に寄進した『釈迦三尊像』3幅と『動植綵絵』30幅が東京で一堂に会するのは初めて。東京・上野の東京都美術館で5月24日まで開催

「陸と海の巨大な王者を白黒のコントラストで描いた。卵形の耳といい、象は今でいう"ゆるキャラ"で愛嬌があります」（山下）

『菊花図』（デンバー美術館蔵）「若冲が生み出し、菊の花などに自在に用いたという『筋目描き』。画箋紙は書道でもよく使います。にじみを表現性に生かす感覚は共通しています」（木下）

『鷲図（わしず）』 若冲85歳の快作。亡くなる2年間の最晩年に描かれた作品ながら、雄々しい大鷲の姿に力強さが満ちている。突き出した鋭角の岩と、くるくると丸みを帯びた波の対比に表現の幅が感じられる／エツコ&ジョー・プライスコレクション

『象と鯨図屏風』（MIHO MUSEUM蔵） 北陸の旧家に伝わり、08年に若冲の作品と確認された。

撮影／本誌・太田真三　構成／渡部美也　スタイリスト／林田淳也（SIGNO）　ヘアメーク／Mio（SIGNO）